

Museum News



絵：柳田 基

2015 秋学期

展覧会 / 講演会

平常展

Gift for the Future
関西学院のあゆみ

－新天地・上ヶ原に馳せた夢－

同時開催 特集陳列

図面にみるヴォーリズの学舎

2016.1.6 (水) ▶ 3.26 (土)

企画展

蔵書票を愛した男

－蒐集家原野賢吉の軌跡－

2015.10.19 (月) ▶ 12.12 (土)

ギャラリートーク

第1回 2015.10.29 (木) 14:00～

第2回 2015.11.17 (火) 14:00～

第3回 2015.12.2 (水) 14:00～

無料 申込不要

公開研究会

第1回

アンデスの織物を観る

講師：河上繁樹 関西学院大学博物館長

アンデスの染織品の実物を目の前にしながら、

織物の拡大写真を映して、さまざまな

織り方を観察します。

2015.11.28 (土) 13:30 ▶ 15:00

会場：関西学院大学博物館実習室

参加費：無料

定員：30名 (先着順)

2年目を迎えた大学博物館

開かれた博物館をめざして

入れ替わる展示

関西学院創立125周年を記念し、2014年9月28日(創立記念日)に開館した大学博物館は、2年目を迎えました。

開館後の1年間に3回の平常展と2回の企画展を開催しました。平常展は「関西学院のあゆみ」のタイトルのもとに本学の歴史や伝統を紹介しています。大学の博物館ですから、その母体となる学校のことについては常設でいつでも観覧できたほうがいいのですが、展示スペースが十分に確保できないため、企画展と入れ替えながら展示をしています。また、展示を常設にしてしまうと、内容が固定化し、すぐに陳腐化するという問題もあり、本館では平常展に特集陳列を同時開催するなどして、「いつ行っても同じ展示」と言われないように工夫をしています。

とは言え、本学のことばかりに目を向けた展示では、観覧者の関心が遠のいてしまいます。大学博物館がめざすべきは、学外の人にも関心を持ってもらえるような開かれた博物館です。

企画展＝コレクションの公開

関西学院大学博物館設置趣意書には、「社会に対して学校法人関西学院の教育研究の成果を発信し、〈略〉加えて、新たな知的財産の収集(寄贈・寄託などを含む)を促進し、〈略〉地域に大きく貢献できる」博物館をめざすと謳われています。

大学博物館が一般の美術館や博物館と異なる点は、学内で行われているさまざまな研究や教育を基盤にした展示が可能なこと。学問の多様さに対応した柔軟な展示活動は、一朝一夕にできることではありませんが、大学博物館の理想であり、これを目標に努力したいと思います。

同時に、博物館はそれ自体が研究機能を備えていなければなりません。博物館は貸しギャラリーではありません。そのためには独自のコレクションを収集し、研究を進め、その成果の公開を通じて地域に貢献したいと考えています。

その願いを込めて、春学期と秋学期に1回ずつ企画展を開催し、大学が収集してきた歴史、文化、美術などの貴重な資料を公開していきます。

話題になった企画展

2015年春学期の企画展「愛新覚羅家の人びと－相依為命－」では、西宮市在住の福永媯生(愛新覚羅溥傑の次女)さんより寄贈された愛新覚羅家の貴重な資料の一部を公開しました。

一家は昭和の激動期のなかで時代の波に翻弄されながらも日中友好に尽力しました。ちょうど戦後70年の節目でもあり、展覧会で一家の写真や手紙などを公開したところ、たいへん話題になりました。新聞各紙やNHKの報道にも取り上げられ、記事を読んだり、TVを見た多くの人たちが博物館を訪れました。福永媯生さんの講演会には1,300人もの応募があり、中央講堂は満員の聴衆で埋まりました。

福永媯生さんが守ってこられた一家の思い出が詰まった大切な資料は、大学博物館に託されました。この資料は一家の思い出にとどまらず、歴史の証拠、証言者として重要な意味があります。それを託され、公開し、未来に残していくことは、大学博物館の使命であり、社会への貢献でもあります。関西学院大学博物館は小さな博物館ですが、学内に留まらず、社会にむかって大きく羽ばたきたいと願っています。

(大学博物館長 河上繁樹)

展覧会報告 I

企画展

あいしんかくら 愛新覚羅家の人びと

あいよつていのちをなす
—相依為命—

福永媯生氏より御寄贈いただいた愛新覚羅溥傑家ゆかりの貴重な品々を、昭和の激動の時代を知る手がかりとして、また激動の時代の中で愛を育んできた家族の歴史として紹介しました。

2015.5.18 (月) ▶ 7.18 (土)

9:30 ~ 16:30 (日曜休館)

開館日数 55日

入館者数 7,378人



愛新覚羅溥傑の言葉

相依為命 (相依って命を為す)

関西学院大学 (博物館開設準備室) は、2013年10月に西宮市在住の福永媯生さんより愛新覚羅溥傑家に関する手紙や写真、書画などの貴重な資料を受贈しました。愛新覚羅溥傑 (1907~94) は、中国・清朝最後の皇帝溥儀の実弟で、「満州国」軍人となり、昭和天皇の遠縁にあたる嵯峨浩と結婚し、二女に恵まれました。媯生さんはその次女です。本展覧会では、時代の波に翻弄されながらも、日中友好に尽力した一家の物語を2つのテーマのもとにご覧いただきました。副題の「相依為命 (相依って命を為す)」は、溥傑がよく口にした言葉で「時代は変わっても、相手を思いやる気持ちがあれば生きていける」という意味が込められています。本展覧会もさまざまな人びとを思いやる機会になることを願い、副題にしました。

愛新覚羅溥傑一家、激動の歴史

愛新覚羅家のあゆみ

愛新覚羅溥傑一家が過ごしてきた日々は、戦中・戦後という激動の時代に彩られたものでした。そうした状況のなかで愛を育んできた家族の想いを展示資料から読み取ろうとしました。

1937年1月に溥傑と浩は見合いを行い、わずか3ヶ月後の4月3日に結婚式が挙行されました。「満州国」皇帝の弟溥傑と天皇に縁のある公卿華族の出である浩の結婚は、当初政治目的で画策されたものでした。しかし、見合いでお互いに惹かれ合い、政治的な思惑を越えた愛情に溢れた「国際」結婚でした。

1938年に長女慧生が、40年に次女媯生が生まれ幸せな時間を過ごしましたが、戦争が家族に影を落とします。終戦後、溥傑はソ連・中国に収監され、浩と媯生は中国大陸を「流転」した末に日本へ引き揚げ、戦中日本に留まった慧生とともに生活を始めました。しかし、溥傑との再会には16年の歳月を待たねばなりませんでした。



1954年秋、突然中国の溥傑から手紙が届きました。慧生が中国の周恩来首相に手紙を出し、溥傑との文通を直訴したためです。これを契機に、離れ離れの時間を取り戻すかのように膨大な量の文通が始まりました。その後慧生の死、『流転の王妃』刊行などを経て、1961年ようやく家族は再会を果たしました。

再会后、溥傑と浩は中国に残り、媯生は日本に戻り福永健治と結婚しました。1972年日中国交が正常化した際、浩はテレビ番組に出演し「これからは、我々も両国人民の子孫万代の為に、すべての障害をのりこえて、心と心をつなぎ、手と手をたづさえて、世界平和の為に、尽しましょう！」と、愛新覚羅家の悲願である国交正常化を喜びました。1974年以降溥傑と浩は何度も日本を訪れました。1987年に浩が、94年に溥傑が逝去した後は、媯生が日中間のかけ橋

として活躍しています。

激動の歴史を生きた一家

愛新覚羅家の人びと

もう一つのテーマは、溥傑・浩夫妻、二人の子である慧生・媯生それぞれの活動に焦点を当て、ゆかりの品々を紹介しました。溥傑は自らの想いを書に残し、浩はその多才ぶりを絵画や和歌、『流転の王妃の昭和史』『食在宮廷』などの執筆で発揮しました。慧生はバイオリンや語学に関心を持ち、特に中国語の習熟は溥傑との文通に大きく貢献しました。媯生は『流転の王妃 愛の書簡』『愛新覚羅溥傑・浩書画集』を刊行し、父母の営みを社会へ発信しています。愛新覚羅家の活動は、時に離れ離れになった家族の交流を生み、時に日本と中国のかけ橋となっています。



開催記念講演会

会期中の5月30日(土)には、ノンフィクション作家本岡典子さんによる「流転の子 最後の皇女・愛新覚羅媯生—語り継ぐ歴史」と題した、本岡さんの著書『流転の子 最後の皇女・愛新覚羅媯生』の朗読と愛新覚羅家の歴史を辿る講演が催されました。また6月20日(土)には「愛新覚羅家の人びと」として、写真を映しながら本岡さんが福永媯生さんにインタビューする対話形式の講演が開かれ、1,000人を越える方にご参加いただき、盛況を博しました。

展覧会報告 II

平常展

Gift for the Future

関西学院のあゆみ

新制中学部の誕生と草創期

1947.4 ~ 1953.3

終戦後間もない1947年4月に新学制のもと大急ぎで調べられた新制中学部。これまで取り上げられることのあまりなかったその草創期の歴史を第1期から4期生までの卒業生有志が集めた資料によって紹介しました。

2015.7.27 (月) ▶ 10.10 (土)

9:30 ~ 16:30 (日曜、8月13 ~ 23日、9月23日休館)

開館日数 57日

入館者数 約2,500人



第1期から4期生までの卒業生有志が集めた資料 卒業生たちの思い

関西学院の新制中学部は、太平洋戦争終結の翌々年1947(昭和22)年に新たな学制に基づいて発足しました。本展覧会は、戦後の貧しく何もない時代に関西学院が新しい思いで創った新制中学部の誕生の経緯と草創期の様子を現代に伝えたいという卒業生たちの熱い思いを受けて企画したものです。

新制中学部の初代部長を務めた矢内正一先生をはじめ、新たな教育に情熱を注いだ先生たちのもとに集った生徒たちは、愛情あふれる教育を受け、心身を鍛え、関西学院の伝統を受け継ぎながら新たな時代にむかって羽ばたいていきました。

今回の展示では、今は取り壊されてしまった旧高等部(旧中学部)校舎で学んだ第1期から4期生までが在学した期間を新制中学部草創期と定義しました。彼ら有志が声をかけあって収集した当時の思い出が詰まる貴重な資料を展示し、新制中学部の教育の原点となる、あゆみの一歩をご覧いただきました。

関西学院の生徒としての姿、今に繋がる伝統

新制中学部の誕生

初代中学部長の矢内はその就任にあたり、自らの日記に「我が愛する一年生に」という文章を記しています(1947年5月22日)。「(一)少年たちよ、若き日に神を知り、常に信仰に生き、望みに生き、愛に生きる少年となれ。(二)少年たちよ、若き日に真実に学問を愛する精神を体得せよ。朝に夕に刻苦精進、学術奉公の精神に

生きる少年となれ。(三)少年たちよ、青白き生きなき少年となるなかれ。強き身体なくして大成は期し難い。日々身体を鍛え強健澆刺たる少年となれ。(四)関西学院の運命は君たち若き少年の双肩にかかっている。常にわが関西学院を愛し、日々夜々至誠と努力とを以てよき学院建設のために協力せよ。」この文章は矢内が初めて教育することとなる幼い生徒たちに向けて考えた関西学院の生徒としてのあるべき姿であり、矢内が彼らを教育する際の道標となる教育方針を綴ったものでした。この文章に書かれている通り、中学部では矢内の指導のもと教科の勉強だけでなく、朝の駆け足や共同生活をしながら協力・親切・寛大・規律等の人間関係を学ぶキャンプが始められました。中学部キャンプの伝統は今にも繋がっています。



卒業生の言葉で綴る

恩師との思い出

卒業生たちは、現代の後輩たちに知ってもらいたいという気持ちとともに当時の恩師や学友に対する感謝や懐古の気持ちも強くお持ちでした。特に草創期の先生と生徒の関係は、「家族愛に近い師弟愛で結ばれていた」といいます。こ

のことを表すように卒業生たちは先生から送られてきた葉書一枚も捨てずに大切に保管しています。また先生たちも卒業後の生徒の近況調査を行い、6枚にも及ぶレポートを625名の卒業生全員(1954年4月時点)に送り届けたということもありました。こうした交流は卒業後数十年経ってもいろいろな形で続き、中学部で過ごした時間が各自の人生とともにあり、長い時間をかけてさらに大きく育まれていることがわかります。今回の展示では、卒業生の言葉で恩師について語っていただくコーナーを設け、パネル展示しました。

開催記念講演会

1期生が語る草創期の新制中学部

会期中の8月4日(火)には新制中学部1期生による二本立ての講演会が開催されました。「関西学院新制中学部 誕生の経緯と草創期の歩み～矢内日記を中心に～」(講師:今田寛)では、初代中学部長の矢内書き綴った日記の記述をもとに理事会記録などには出てこない草創期の新制中学部での出来事を紹介されました。「新制中学部タッチフットボール事始め～大学アメリカン第一期黄金時代の基礎」(講師:丹生恭治)では、ご自身の日記をもとにタッチフットボール部の誕生秘話や当時の試合スコアなどを写真を交えてお話しくださいました。



特集陳列

図面にみるヴォーリズの学舎

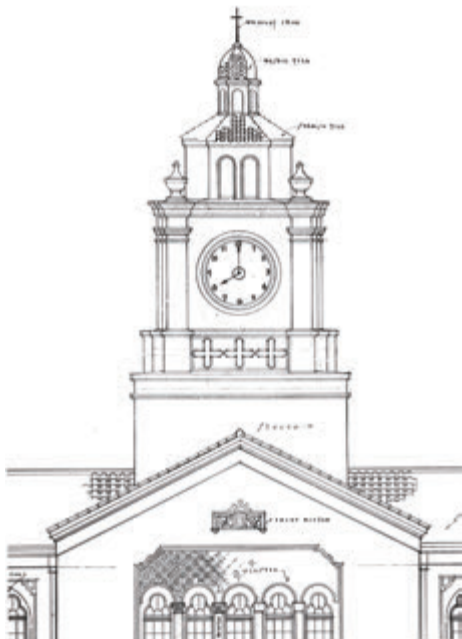
W.M. ヴォーリズ (1880～1964) はアメリカ・カンザス州生まれ。建築家になる夢を持ちながら YMCA 活動に参加していた彼は、1905 (明治 38) 年滋賀県立商業学校の英語科教師として来日しました。1908 (明治 41) 年京都基督教青年会館を新築する際に現場監督を任せられ、これを機に建築事務所を設立したことで海外伝道のために諦めかけた建築家への夢を実現させることになりました。1910 (明治 43) 年近江八幡にヴォーリズ合名会社 (1920 年ヴォーリズ建築事務所に改称) を設立し、戦前だけで 1,500 件あまりの建築設計を行いました。また翌年には近江ミッション (後の近江兄弟社) を結成し、伝道とともに医療や教育などの活動にも取り組みました。ヴォーリズにとって建築とは伝道と一体のものだったのでした。



写真：公益財団法人近江兄弟社 提供

ヴォーリズと関西学院の関係は、原田の森時代から始まります。1910 年学院経営にカナダ・メソヂスト教会が参加したことで新たな建築計画が立ち上がり、その設計をヴォーリズに依頼しました。そして神学館 (1912 年落成) を皮切りに、普通学部やハミル館など多くの「作品」が建てられました。1927 (昭和 2) 年上ヶ原への移転が決まると、ヴォーリズは甲山を背景にして正面に時計台 (当時は図書館) を据え、その前の芝生を囲むように文学部や神学部、中央講堂などを配置しました。原田の森の建築が主に赤煉瓦造りであったのに対し、上ヶ原は赤い屋根瓦にクリーム色の壁が特徴的なスパニッシュ・ミッション・スタイルに統一されています。

建築物だけでなく、その元となる図面にもまたヴォーリズの魂が宿っています。今回株式会社一粒社ヴォーリズ建築事務所の御厚意により、上ヶ原キャンパスの建築物の図面を中心に展示します。



図面：株式会社一粒社ヴォーリズ建築事務所 所蔵

2016 春学期 展覧会

平常展

Gift for the Future
関西学院のあゆみ

－学院創立にかけた情熱－

同時開催 特集陳列

描かれた聖書

－渡辺禎雄の版画－ (仮)

2016.4.1 (金) ▶ 5.28 (土)

企画展

古代アンデスの染織品 (仮)

2016.6.6 (月) ▶ 7.23 (土)

南米に聳えるアンデス山脈、その過酷な環境のもとで人びとは自然へ畏敬の念をいだき、山間に生息する動物を神として崇拜しました。文字の文化をもたない彼らは、糸を染め、布を織りながら、メッセージを込めました。古代アンデスの染織品に見られる想像力豊かな神や動物を展覧します。

平常展

Gift for the Future
関西学院のあゆみ

－学院を築いた 4 人の院長－ (仮)

同時開催 特集陳列

新収藏品展 (仮)

2016.8.1 (月) ▶ 10.1 (土)



関西学院大学博物館通信 第2号
KGU MUSEUM NEWS No.2

2016.3.1

関西学院大学博物館

〒662-8501

西宮市上ヶ原一番町 1-155

TEL 0798-54-6054 FAX 0798-54-6462

URL <http://museum.kwansei.ac.jp/>